

小峰城よもやま話

第十三話
藩の転封と
城の引き渡し

4月は入学・就職・転勤の季節です。転勤する方は、後任の方と引き継ぎをした方もいたのではないのでしょうか。

江戸時代の大名も時期はまちまちですが、領地を移る「転封」がありました。

文政6年(1823)に松平定信の子、定永が桑名へ移り、忍藩(行田市)の阿部正権が白河に移ってきた際のことを紹介しましょう。

白河にいた定永が幕府から江戸に来るように、との知らせを受けたのは3月12日でした。この時点では何の呼び出しが分かりません。

急ぎ準備して18日に白河を出た定永は、22日に江戸に着き、24日に江戸城で將軍から桑名転封を申し渡されました。

急な転封の知らせに、実際に桑名へ引越す白河の家臣は準備に追われました。例えば当時は、藩の財政難などで家臣たちは借金を抱えていました。白河を出発するまでに返せず、桑名に移ってから返済するという、白河の町人宛ての借用証文から引越しの慌ただしさがかがえます。

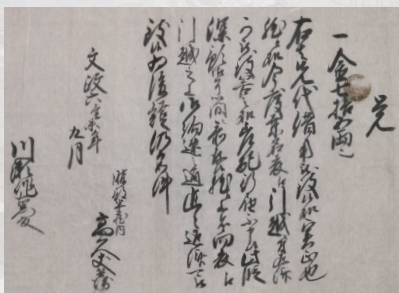
幕府からも、入れ替わる大名家との打ち合わせや、城の建坪、米や武具の量、堀の深さ、城壁

の狭間(鉄砲や弓を放つ隙間)の数の報告などが指示され、作成する城絵図には櫓・門の数、寺や町の名の記入まで指図されています。

このように転封は、幕府が細かく指示し、城も大名同士で直接は受け渡しできず、必ず幕府の使者(上使)が派遣され、立ち合いました。城や領地は「將軍が一時的に預けている」と認識されていたためと考えられています。

受け渡し当日(9月28日)、上使が小峰城に入り、受け渡し開始を指示すると、城の各門が松平家から阿部家の門番に引き渡され、続いて書類などが引き継がれました。

こうした手続きを経て、転封はようやく完了するのです。



▲今までの借金を桑名転封後に返済する旨を記した松平家家臣服部半蔵の借用証文(歴史民俗資料館蔵)

渋沢栄一×松平定信

南湖を彩る系譜

第四回
松平定信の革新的政治

松平定信は保守的政治家の印象がありますが、実際には先駆的政策をいくつも行っていきます。政治理念を同じくする仲間と「政策研究会」にあたるものをつくり、老中就任の際には、その中から優秀な人材を幕閣に登用しました。

東京学芸大学名誉教授竹内誠氏は「定信は初めて政策政治を行い『吉宗政策と田沼政策を一步進めた両方の延長線上にある政策』を実行した」と高く評価しています。

寛政の改革の中で、定信は民政を担当する郡代と代官を大幅に(19人)入れ替えています。「悪代官」を一掃し、有能な代官を抜擢して農村を立て直そうとしました。その中に、塙代官寺西封元がいました。

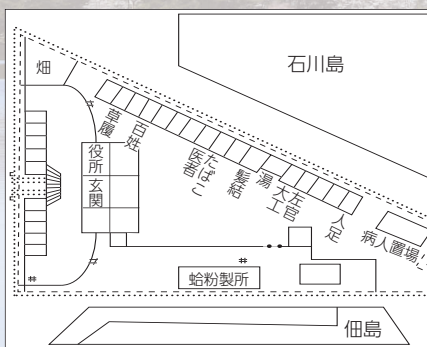
封元は、定信の政治方針に倣った間引き防止や人口増加策を実行します。また、広域的な連携が必要であると考え、水戸藩・白河藩・棚倉藩をはじめとする十数藩の役人を集めた「地方官会議」を開いています。このような画期的な事業の陰には、定信の影響あるいは支援があったに違いありません。

また、火付盗賊改の長谷川平蔵の提案を受けて、定信は石川島の埋め立て地に「人足寄場」

をつくり、江戸の無宿人を集めて職業訓練を施してから社会に出すという、社会福祉的な政策を行っています。さらに「集古十種」のような文化財保護の先駆けとなる事業も行っています。これらの政策は、定信の革新的な政治といえるものではないでしょうか。



▲『寺西重次郎封元肖像画』(秦太郎氏所蔵)



▲寛政2年(1790)の人足寄場(『一話一言』より)

(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)

お知らせ

ラウンジ

りぼらん

シリーズ

子育て

保健

くらしの情報館

手話

高齢者サロン

休日当番医・無料相談ほか

市長の手控え帖